

区ごとの地域づくりの方向性

5つの区には、それぞれの成り立ちや特色があります。

「区ごとの地域づくりの方向性」は、「地域づくりの方向性」を踏まえつつ、区の魅力や未来への想いについて話しあう区民参画イベントを開催しながら作成を進めました。

これを自分と縁がある地域のために何かしたいという想いを行動に移すきっかけになるように、幅広く共有していきます。

そして、住民をはじめとして、様々な方々がつながりを持って、個性あふれる地域づくりを進めることで、4つのGreenを高め、「挑戦を続ける、新たな杜の都へ～“The Greenest City”SENDAI～」の実現を目指していきます。

青葉区

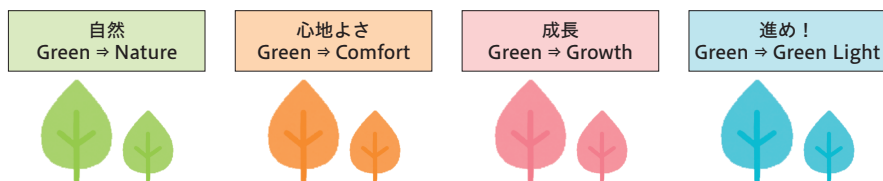
宮城野区

若林区

太白区

泉区

凡例：(目指す都市の姿4 類型)



青葉区

1 区の成り立ち

(1) 位置

青葉区は、市の中心部に位置し、都心から船形連峰の山形県境まで、北西方向に帯状に広がる本市最大の区です。広瀬川が35kmにわたって区域を東西に貫いており、西部に位置する宮城地区は、区の面積の86%を占めています。

交通の要衝である仙台駅を中心として交通機関が充実しているほか、国道48号とJR仙山線が東西に走り、東北自動車道が南北に通っています。



青葉区 (うち宮城総合支所管轄地域)		
人口	311,134人	73,852人
世帯数	163,841世帯	29,048世帯
面積	302km ²	260km ²

※2020.10.1現在推計人口

(2) 成り立ち

青葉区は、市制施行当時の旧仙台市域を中心として、昭和に入り編入された旧七北田村の荒巻・北根地区や旧生出村の折立地区、そして政令指定都市移行の中で合併した旧宮城町を区域としています。

区名は、藩祖伊達政宗公が仙台城を築いた青葉山や、「杜の都」のシンボルロードである青葉通に由来します。かつて城下町に広がった緑は、時代を経て形を変えながらも、「杜の都」を象徴する青葉という言葉とともに、現代に受け継がれています。

2 特性と動向

(1) 現状

青葉区は5区の中で最も人口が多く、市全体の人口の約3割を占めています。区内には大学や専門学校が多く立地していることで、多くの若い世代が集まっており、20～24歳の人口割合が5区の中で最も高くなっています。加えて、昼夜間人口比率^{※1}も最も高く、区外から通勤や通学をしている人が多くなっているほか、市全体の外国人の約半数が区内に居住しています。

西部の宮城地区については、JR仙山線や仙台西道路などの交通網が

※1：昼夜間人口比率

夜間人口100人当たりの昼間人口であり、その地域の流出・流入を示す指標。夜間人口は地域の常住人口。昼間人口は常住人口に他の地域から通勤・通学してくる人口を足し、他の地域へ通勤・通学する人口を引いた人口。

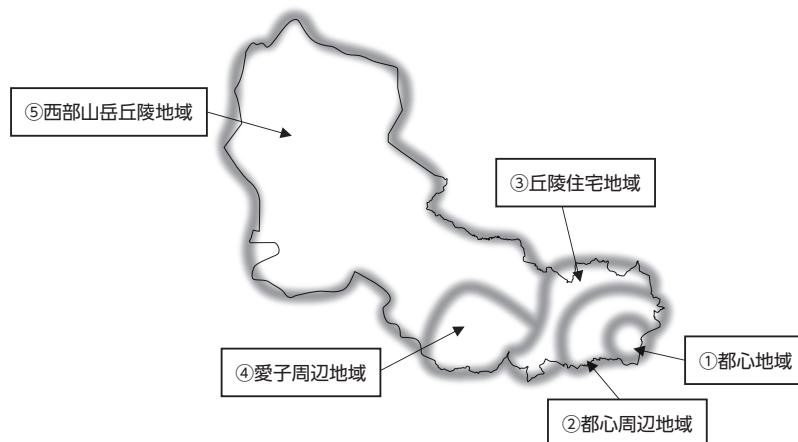
整備されていることから、錦ヶ丘や愛子などには多くの子育て世帯が居住し、0～14歳の人口割合が高くなるなど、政令指定都市移行後、人口は一貫して増加し続けています。一方、地区の西部は市内でも高齢化率の高い地域となっており、将来的な人口減少率も他の地域より高くなることを見込まれています。

(2) 地域の特徴

青葉区は、仙台駅を含む都心から山形県との県境までを包含する広い区であるため、地域ごとに様々な特性を有し、近代的な都市機能と豊かな自然環境が共生する「多様性」が区の特徴となっています。

仙台城及びその城下町を起源とする市中心部を擁する青葉区は、1945年の仙台空襲で受けた多大な被害からの復興を遂げ、事業所数、従業者数が他区の倍以上あるなど、東北地方の中枢を担う本市の中でも、行政・経済の中心として、様々な都市機能を集積し続けています。反面、集積した機能の更新や、転入者や若い世代の地域とのつながりの確保、東日本大震災を踏まえた防災対策など、時代に合った新たな魅力・仕組みの創出が必要となっています。

また、宮城地区では、少子高齢化のさらなる進展に加え、人口減少社会の到来が予見されている中、人口が急速に増加し、生活基盤施設等の更新や新たな整備が要請される地域がある一方、生まれ育った場所での生活やコミュニティの維持が困難になりつつある地域があるなど、それぞれの地域の個性や特色に応じた多彩なまちづくりを進めながら、地区全体としての魅力向上に取り組む必要があります。



① 都心地域

仙台駅を中心とした都心地域は、商業・業務機能、行政機能、交通結節機能などの東北を支える多様な都市機能が集積しています。定禅寺通や青葉通のケヤキ並木は都心の景観に彩りを与え、仙台・青葉まつりや仙台七夕まつりなど、仙台を代表する多彩なイベントの舞台として賑わいを創出しています。また、国分町や昔ながらの横丁などが娯楽・憩いの場として多くの方々の交流を生み出しています。

近年、建築物の老朽化が進行するとともに、オフィスビルの新規供給が停滞していることが企業進出の妨げになっている状況です。また、仙台駅周辺に人の流れが集中していることから、中心部商店街の活性化や公共空間・民間の遊休不動産の利活用などを通じて、都心全体の価値を高める取り組みが求められています。

② 都心周辺地域

都心周辺地域は、藩政時代の面影を残す暮らしや伝統、街並みが受け継がれている一方で、多くの新しい住宅や店舗が建ち並んでいることに特徴があります。仙台城跡や大崎八幡宮などの歴史資産に加え、貴重な自然、大学の知的資源や文化的資源を有し、観光・学術の中心となっています。

集合住宅の建設が続き、人口は増加していますが、集合住宅居住者の地域コミュニティへの参加が進んでいない状況であり、その対応が必要となっています。また、道路や公園などの生活の基盤となる施設の老朽化対策やバリアフリー化も求められています。

③ 丘陵住宅地域

都心周辺地域の外縁、北部から西部の丘陵地帯から仙台北環状線沿線にかけて、高度経済成長期以降に開発された郊外住宅団地が連なっています。

高齢化率が区内の平均より高い地域であり、それに対応したまちづくりが必要となっています。管理が行き届かない空き家が目立ち始め、周辺的生活環境へ影響を及ぼす傾向にあり、また、道路や公園といった生活の基盤となる施設について、地域環境に応じた対策が求められています。今後、さらなる高齢化の進展により、買い物などの日常生活への支障も懸念され、地域での支えあいや高齢化に対応したサービスの需要増加が予想されています。

④ 愛子周辺地域

愛子及び周辺地域は、住宅地の開発や市内中心部からの利便性の向上により、15歳未満の年少者や30歳代の子育て世代など、若い世代を中心に人口の増加が顕著となっています。さらに、宮城総合支所周辺では、大規模な土地区画整理事業が計画されており、区域内に様々な施設が整備されることで、地区全体の環境が大きく変化することが予想されます。

増加する人口や交通量に対応するため、安全な歩行空間の確保などのインフラ整備が求められています。また、子育て環境の整備や、良好な地域コミュニティ形成のための取り組みが必要となっています。

⑤ 西部山岳丘陵地域

区の西部に広がる山岳丘陵地域は、雄大で多様性に富んだ自然と、それと調和した里山、田園が広がる風光明媚な地域であり、作並や新川、定義周辺などでは四季折々の環境を活かした活動を楽しむことができます。また、作並温泉や定義如来などの歴史的な名所を有し、歴史や伝統文化を享受することができます。

市内でも高齢化率の高い地域であり、児童数の減少から小学校の統合が行われ、また地域交通の確保などの課題が顕在化してきています。野生鳥獣による農作物等被害などへの対策も含めた安全・安心な暮らしの確保とともに、交流人口を増やすさらなる取り組みを早期に進めていく必要があります。

3 地域づくりの方向性

(1) 多くの人が集い、賑わいと交流の場となる活力あるまち

青葉区は、高度な都市機能と豊かな自然、そして多彩で魅力のある観光コンテンツがそろっています。多様な主体と協働しながら地域の魅力を高めることで、個性があふれ、多くの人々が訪れたいようなまちを目指します。

都心地域において、老朽建築物の建て替えや企業ニーズに合ったオフィスの整備を促進します。また、それらを契機として土地の高度利用を進めるとともに、公共空間と民有地が一体となった新たな賑わいの創出に向けた取り組みを推進します。

定禅寺通や青葉通、また、勾当台公園などの都市公園においては、多くの人が集う、魅力ある都市空間の形成を進めるとともに、エリア



マネジメント組織や地域との連携を図りながら、中心部商店街の活性化やリノベーションの促進により、都心全体に賑わいを広げる取り組みを進めます。

また、人口減少が続くことが予想されている西部山岳丘陵地域では、地域課題の解決と新たな賑わいの創出に向けて、豊かな自然環境や歴史、温泉といった地域資源を活用するとともに、先端技術を有する企業や様々な分野のアーティストなどと連携し、多彩なアイデアを出しあいながら、新たな取り組みを積極的に進めます。



(2) お互いを認めあい、支えあう、誰もが健やかで心豊かに暮らせるまち

青葉区に住む様々な世代や異なる国籍の方々が、お互いを認めあいながら、いきいきと暮らしていくためには、近隣同士で支えあう顔の見える関係づくりや、地域の資源を活かしてつながりを深める取り組みが大切です。

日頃からの地域での関係づくりのため、町内会をはじめとする地域団体の担い手の育成などに取り組むとともに、住民が主体となった地域活動を促進します。

地域活動への参加が進んでいない集合住宅居住者や、増加傾向にある外国人住民の方々に対しては、地域社会の一員として暮らしていくことができるよう、地域内の交流を促進する取り組みを進めます。

また、宅地開発等による人口の増加が特に顕著な愛子周辺地域では、従前からの住民と子育て世代が多い新たな住民との交流を深め、良好な地域コミュニティを形成していくことが求められていることから、地域資源や伝統文化などを活かした交流の場づくりを進めます。特に、子育て世代のニーズに対応するため、子育て環境の充実に取り組みます。

地域による支えあいの視点のもと、生涯を通じた健康づくり、生きがいづくりなど、高齢化率の高まりが見られる丘陵住宅地域などを念頭に、ライフステージに応じたきめ細かな取り組みを行い、誰もが住んでよかったと思える一体的な地域づくりを進めます。



(3) 地域の防災・防犯力を高め、安全で安心して過ごせるまち

地域の安全・安心のためには、自然災害への対応、防犯力の向上、交通安全など、様々な視点で、地域の実情に応じた取り組みを充実させることが大切です。

東日本大震災の際には、宅地や建物の被害が見られたほか、公共交通機関の全面停止により多くの帰宅困難者が発生し、仙台駅周辺の地域の避難所運営にも支障が生じました。その教訓を活かし、地域防災リーダー（SBL）の育成や防災訓練の実施など、日頃からの防災力の向上に向けた活動を支援するとともに、企業等と連携しながら帰宅困難者への対策を進めます。

また、防犯力を高め、犯罪が起きにくい地域をつくるため、自主防犯組織、町内会や学校、地域団体等の連携による地域ぐるみの防犯活動を推進します。加えて、近年増加傾向にある空き家への対応や、主要な交通手段の一つとなっている自転車の安全利用なども推進し、安心して暮らせる地域づくりを行います。

生活の基盤となる施設については、老朽化への対応や、人が集まる施設の周辺を中心としたバリアフリー化が必要となっている地域もあるため、地域の实情に応じた機能を確保していきます。



（４）杜の都の自然、歴史が息づき、文化の薫るまち

青葉区は、高度な都市機能を有するとともに、豊かな自然、都心周辺地域における歴史的な景観や暮らしの中に息づく文化などの恵まれた資源を有しており、それらは青葉区のみならず「杜の都」のシンボルとなっています。これらの資源に親しみ、地域に対する理解を深めることは、地域への愛着と誇りを持ち、地域や社会に関わることに繋がります。

博物館やせんだいメディアテーク、市民センターなどをはじめとする社会教育施設では、これまでも、地域資源を活かした学びによる交流が行われ、地域づくりや文化の継承を推進する力となってきました。青葉区には、学生を中心とした若い世代が多いことなどから、地域資源を活かした学びの機会を提供し、その過程において様々な世代が交流する機会づくりに取り組むことにより、人と人とのつながりを深め、地域の活性化につなげていきます。

また、豊かな地域資源を次の世代へ継承するとともに、あらゆる世代の人が、仙台ならではの魅力を楽しめる機会を創出し、交流人口の拡大を図ります。

宮城野区

1 区の成り立ち

(1) 位置

宮城野区は、市の北東部に位置し、仙台駅東口から仙台塩釜港にかけて広がる区域です。東は太平洋に面し、西は仙台駅東口一帯の市街地が広がり、北は県民の森の一部である丘陵部、南に広がる平野部は若林区と接しています。

JR東北本線、JR仙石線が区内を横断し、国道4号仙台バイパスや国道45号などの主要幹線道路が通っているほか、仙台駅東口には地下鉄東西線の駅を有しています。



宮城野区	
人口	196,885人
世帯数	96,023世帯
面積	58km ²

※2020.10.1現在推計人口

(2) 成り立ち

宮城野区は、現在の宮城野区西部に位置する市制施行時からの旧仙台市域の一部と、昭和に入り編入した原町や岩切村、高砂村を区域としています。

区名の由来は、かつて市街地の東部一帯に広がり、古くから歌枕として全国に知られた「宮城野」にあります。江戸時代までは、萩や鈴虫の名所として広々とした草原が維持され、都市開発等により原風景が失われた現代においてもなお、「宮城野」という町名は残されています。

2 特性と動向

(1) 現状

宮城野区は他区と比べて年少人口と生産年齢人口の割合が高くなっています。人口1,000人当たりの出生数が5区の中で最も高く、出生数が死亡数を上回る自然増によって区内の人口増加が支えられています。仙台駅の東側やJR仙石線沿線では戸建て住宅や集合住宅が建設されており、岩切や田子などの地域では生産年齢人口の増加が見込まれる一方で、それ以外の地域では人口減少・少子高齢化が進行するこ

とが予想されています。

宮城野区は5区の中で単身高齢者割合が最も高く、鶴ヶ谷など高齢化の進行が顕著な地域も存在しています。地域によって人口構成の変化に濃淡があるため、それにより生じる影響を念頭に置いたきめ細かな対応が求められています。

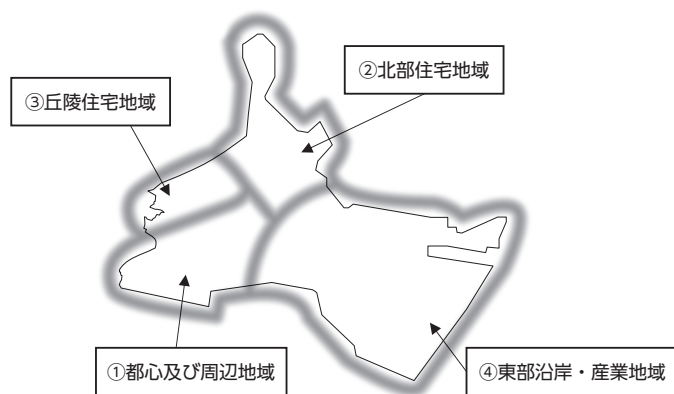
(2) 災害からの復興まちづくり

2011年の東日本大震災では区域の35%が浸水し、中野・蒲生や岡田をはじめとする沿岸地域は甚大な被害を受けました。その後、災害危険区域を設定して内陸への集団移転を行うとともに、防潮堤やかさ上げ道路、海岸防災林などの多重防御、避難のための施設整備などによる総合的な津波対策を実施し、復興への歩みを着実に進めています。

これまで、数多の災害を住民の創意工夫や協働によって乗り越えてきましたが、今後は、東日本大震災の経験と教訓の継承とともに、沿岸部の新たなまちづくりに取り組んでいくことが求められています。

また、七北田川や梅田川の流域においては、大雨や長雨による洪水、台風などにより度々大きな被害を受け、堤防の建設や河川の改修などの対策を進めてきました。近年の豪雨被害も踏まえ、洪水浸水対策に継続して取り組んでいく必要があります。

(3) 地域の特性



① 都心及び周辺地域

仙台駅の東側は、江戸時代には武家屋敷街から農地、その後は果樹園、製糸工場へと姿を変えていきました。北側の二十人町と鉄砲町は、足軽が住む町でしたが、明治時代になると塩釜へ向かう街道

に面し、商店街へと変貌していきます。その後、大規模な土地区画
整理事業が進み、宮城野通を基軸とした新しい街並みが形成される
とともに、その周辺地域においても、住宅地が広がっていきま
した。近年は、東北楽天ゴールデンイーグルスが本拠地を構える
とともに、地下鉄東西線の開業や仙台駅東西自由通路の拡幅に併
せて商業施設の開発が進んだほか、宮城県による県民会館など県
有施設の集約・移転の検討が進むなど、当該エリア一帯に新た
な賑わいづくりの機運が高まっています。

② 北部住宅地域

七北田川沿いに位置する岩切は、多賀城や塩竈、利府へ通じる道
と東西に延びる道が交差する交通の要衝です。古墳時代の鴻ノ巣遺
跡など多くの集落ができ、中世においても「府中」と呼ばれる行政
の中心地域でした。岩切城跡をはじめ、市内最大の板碑の密集地
である東光寺を有するなど歴史の息吹が感じられる場所が随所に
あります。当該地域を統括していた留守氏が岩手県に移った後は、
農村が広がり、稲作は有数の生産力を誇るほどになりました。明
治時代に鉄道が通ると、交通上の重要性は一層高まり、作物の出
荷も進みますが、農業の兼業化とともに、水田や畑地は住宅や店
舗などに姿を変え、近年は若い世代が多く集まる地域になってい
ます。

③ 丘陵住宅地域

国道45号以北の丘陵部は、江戸時代には山林が広がり、藩主の
狩猟の場ともなっていました。しかし、戦後に人口が急増し、周
辺の丘陵を造成して住宅団地が作られるようになり、都市域が拡
大していきました。現在は鶴ヶ谷をはじめ、開発時期の早い団地
が成熟期を迎えており、市の中でも高齢者の割合が高い地域で
す。市営住宅の建て替えに伴うコミュニティづくりや、地域固有
の課題解決に向けた住民主体の取り組みが進むなど、住民が安心
して暮らせる環境づくりが進められています。

④ 東部沿岸・産業地域

七北田川下流域の平野部は、田畑が広がる農業地帯で、居久根
と呼ばれる屋敷林に囲まれた農家が点在していました。明治時代
を迎えても多くの住民が農業に従事し、戦後も米作中心の農業
地帯である状況が続きますが、仙台塩釜港の建設を契機に、工
場や倉庫が建ち並ぶようになり、幹線道路が整備されると、大
型店や事業所、住

宅が増えてきました。岡田地区南蒲生・新浜などの沿岸部は、東日本大震災の津波により、大きな被害を受けましたが、コミュニティの再生に向けた新たなまちづくりが進められています。また、中野・蒲生地区を中心に産業集積が進んでいるほか、仙台港背後地には、仙台うみの杜水族館や大型商業施設などが立地し、活気をもたらしています。

3 地域づくりの方向性

(1) 海辺のふるさつをつくる

～集い、想いをつなぐまち～

東日本大震災の経験を踏まえ、多重防御の構築に向けたハード面の整備が進み、住民の防災意識や町内会を中心とした災害対応力が向上するとともに、津波で被災した沿岸部においても新たなまちづくりの萌芽が生まれてきています。今後は、震災の教訓を伝える取り組みはもとより、沿岸部に再び人々が集い、笑顔が行き交うまちになるよう、新たな海辺のふるさつをつくります。

東日本大震災の経験と教訓を継承する取り組みを通じて、一人ひとりのあらゆる災害への危機管理意識をより一層高めることで、災害時に誰もが冷静に行動できる安全に暮らせる地域づくりを進めます。

津波被災地域のコミュニティの再生と活性化に向けては、被災された方々が気軽に集い、つながりを深める場づくりに取り組むとともに、地域で暮らす方々の企画立案による域内外の交流創出に向けた取り組みを促進します。

また、海岸公園をはじめ、日和山や蒲生干潟、貞山堀など震災を乗り越えてきた資源の活用を進めるとともに、地元住民の方々などの意見も踏まえて、震災の記憶や地域の文化を伝えるコンテンツの充実・発信に取り組み、東部沿岸地域一帯の回遊性を向上させ、海辺の賑わいづくりを推進します。

(2) 都心のシンボルエリアをつくる

～賑わいをつくり、可能性を活かせるまち～

仙台駅の東側は、地下鉄東西線の開業及び仙台駅東西自由通路の拡幅などを契機として、民間開発や集客促進に向けた機運が高まっています。今後は、「働く」「住む」「学ぶ」「楽しむ」といった豊かなライフスタイルの一部として、より魅力あふれる都市空間とするため、住民や民間企業とともに知恵を出しあい、多くの人々が気軽に集い、訪れ

るとわくわくするような新たな都心のシンボルエリアをつくります。

仙台駅東エリアの賑わい創出に向けては、地域のまちづくりを担う団体などとの連携を図りながら、イベント開催などの都市空間の有効活用や情報発信を通じて、宮城野通を基軸としたエリア特性を高める取り組みを推進します。

公共空間の利活用については、住民参加型で検討を進めてきた駅東1号、2号公園のほか、榴岡公園や藤村広場など個性豊かな都市空間を活かして、新たな交流や回遊を生み出し、近隣住民やこのエリアで働く方々をはじめ、多くの人々が憩い、賑わう環境づくりに取り組みます。



(3) 心地よいコミュニティをつくる

～支えあい、安心して暮らし続けられるまち～

宮城野区は、5区の中で最も出生率が高く、子育て世代が増加している地域がある一方、開発時期の早かった住宅地を中心に高齢化の進行が顕著な地域もあり、人口構成や課題は地域によって様々です。また、大規模な市営住宅の建て替えが進む地域もあります。今後は、関係支援機関との連携を促進することはもとより、住民同士が世代を超えてつながり、多様性を尊重しあいながら、お互いの顔が見える心地よいコミュニティをつくります。

地域の担い手の育成や交流のための事業を展開するとともに、社会的孤立や地域交通など地域が抱える課題への解決に向け、住民が主体となった関係機関や専門家等との協働の取り組みを促進し、人とのつながりや自分の役割を実感しながら、誰もが安心して暮らせる地域づくりを進めます。

子育て世代の育児不安や育児孤立の解消に向けては、保育所や児童館など地域の児童福祉施設の運営団体や子育て支援に取り組むNPO等との協働により、子育ての楽しさを実感できるような場づくりや子育て世代のネットワークの形成など、地域のつながりを深める取り組みを進めます。



(4) 新たな魅力に出会える場をつくる

～ふるさとを知り、元気を体感できるまち～

宮城野区には、歴史・自然資源、水族館やプロ野球チームの本拠地、スポーツ施設など仙台市を代表する多くの観光・交流スポットがあります。今後は、多彩な資源を多くの方々がより一層快適に楽しめる環

境をつくるため、民間企業等との連携を進めるとともに、未来の地域づくりの担い手である子どもたちや若者の地元への関心や想いを深めることができるよう、新たな魅力に出会える場をつくります。

区内外の方が訪れる仙台塩釜港周辺地区については、集客力の高い民間施設との連携により、回遊性を高め、エリア一体となった魅力の向上に取り組み、仙台を代表する交流と賑わいの拠点づくりを進めます。

また、市民センターや住民発案の企画を通して、地域の歴史や文化を未来に継承する取り組みを進め、子どもから大人まで、あらゆる立場の方々のふるさとへの意識を育む機会を創出します。そして、こうした学びの場や体を動かす機会、世代を超えた交流の機会をつくることで、地域の魅力を実感し、地域づくりへの参画意識を高める好循環を生み出します。

若林区

1 区の成り立ち

(1) 位置

若林区は、市の南東部に位置し、5区で最も規模の小さな区です。東は太平洋、西に旧仙台北城下である市街地が広がり、南は広瀬川と名取川沿いに太白区、北は宮城野区と接しています。

地下鉄東西線の東の始発駅を有し、国道4号、仙台東部・南部道路、県道10号塩釜亘理線など主要な道路が張り巡らされているほか、仙台空港や仙台塩釜港にも近い地域です。



若林区	
人口	139,157人
世帯数	67,739世帯
面積	50km ²

※2020.10.1現在推計人口

(2) 成り立ち

若林区は、1928年に仙台市に編入された七郷村の南小泉地区と、1941年に編入された六郷村、七郷村に加え、政令指定都市に移行して区制が敷かれた際に組み込まれた名取川北岸の四郎丸地区の一部を区域としています。

区名の由来は、藩祖伊達政宗公が日常の居所として晩年を過ごした若林城（現宮城刑務所）にあります。若林城を起点として築かれた城下町の町割りの特徴づける地名は、政宗公が没し、若林城が廃された現代もなお生活に息づいています。

2 特性と動向

(1) 現状

若林区は5区の中で人口が最も少ない区ですが、2015年の地下鉄東西線の開業により区内には5つの駅が新設され、人口は大きく増加しています。地下鉄沿線には戸建住宅や集合住宅、商業施設などの立地が進んでおり、加えて区域の西から東まで平地が続き、自転車での移動がしやすいことから、子育て世帯などの若い世代が移り住む地域に変わろうとしています。

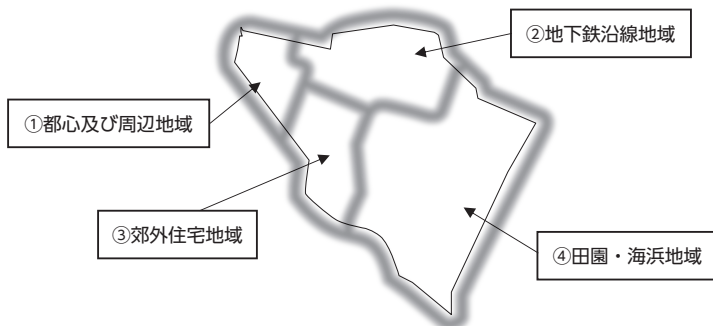
今後、若林区は人口減少が緩やかに推移すると見込まれていますが、東日本大震災の影響を受けた沿岸部や昭和に開発された住宅地では、人口減少・少子高齢化が進んでいる地域も存在しており、地域差が顕著になっています。地下鉄東西線が開業したことに伴って生活環境が変化した地域もあるため、住み慣れた場所で安心して暮らしていけるように、地域の実情に応じた対応が必要とされています。

(2) 災害からの復興まちづくり

2011年の東日本大震災では、津波により区域の56%、内陸約4kmにわたり浸水し、壊滅的な被害を受けました。元来、海岸部には、美しい白砂青松が連なり、東部地域には居久根と呼ばれる屋敷林が取り囲む中小の集落が、田園の中に浮島のように点在し、豊かな景観が作りだされていました。津波によりそれらの景観や営みの数々が失われ、海沿いの地域で暮らす方々の多くが移転を余儀なくされましたが、市民による杜を再生する取り組みや農地の整備が行われた結果、田園地域は再生し、現在では美しい風景を取り戻しつつあります。また、人口減少が進む中、地域住民はコミュニティの再生や活性化に取り組み、住民自身が交流事業を企画するなど新しい歩みを進めています。今後は、東日本大震災の経験と教訓の継承とともに、沿岸部の新たなまちづくりに取り組んでいくことが求められています。

過去を紐解けば、若林区には津波だけでなく、様々な自然災害のリスクが存在しています。沖積平野特有の軟弱地盤や平坦地は地震時に揺れやすく、他区と比べて、液状化や大雨による浸水リスクが高い地域も多くあります。このように、地形的な条件による防災上の課題が存在するため、自然災害時のリスクを軽減するための継続的な取り組みが必要とされています。

(3) 地域の特徴



① 都心及び周辺地域

区域の西側は中心市街地の一角を構成し、建物の高層化や集合住宅の建設による人口の流入が進んでいます。また2023年には、仙台市立病院跡地に東北学院大学の五橋キャンパスの開設が予定されており、交流人口が大幅に増加することも想定されます。南鍛冶町、畳屋丁、南染師町、舟丁など藩政時代の営みが垣間見える町名や、歴史的・文化的な建築物も残っており、旧奥州街道沿いには現在も個性的な店舗が立ち並ぶ商店街があるなど、日常生活に深く歴史が根差している地域でもあります。

② 地下鉄沿線地域

荒井駅周辺では複数の土地区画整理事業等により生活環境の整備が進み、人口が急激に増加しており、子育て世帯や沿岸部から移転した高齢者世帯など多様な世代が混在する中、コミュニティ活性化の工夫が求められています。また、卸売・流通・印刷などの大規模な産業機能が集積している卸町駅や六丁の目駅周辺では文化芸術活動や起業支援などの場がまちの多様性を生み出しており、加えて操業環境向上のため移転の検討が進められている仙台工業団地の移転元地には新たな賑わいや交流を創出するまちへの転換が期待されます。一方で、薬師堂駅周辺では陸奥国分寺や陸奥国分尼寺など歴史資産を活かしたまちづくりが行われています。

③ 郊外住宅地域

地下鉄沿線地域の南側、国道4号を挟んで東西に位置するエリアには、昭和の時期から住宅地が形成され、幹線道路沿いには中高層の集合住宅や業務ビルが立地しています。生活インフラも整っており、市の中心部からも遠くないことから戸建住宅の建て替えや既存建物の耐震改修が緩やかに進んでおり、アパートなどの集合住宅も増加していますが、地域内の人口は減少傾向にあり、高齢化率も高くなっています。また、河川氾濫による浸水想定区域が広く分布していることから、治水に関する住民の関心が高いことにも特徴があります。

④ 田園・海浜地域

区の東部に広がる田園・海浜地域は、中小の集落が点在し、仙台市の農業地帯として稲作や野菜、花きなどの近郊農業が盛んな地域でしたが、東日本大震災により発生した津波によって甚大な被害を

受け、防災集団移転等によって人口は大きく減少しました。しかし、その後、農地の大区画化を図るほ場整備、津波避難施設や海岸公園、東部復興道路（かさ上げ道路）等の整備が行われ、レクリエーションや農業などをテーマとした集団移転跡地の利活用なども進んでおり、震災の記憶を後世に伝えるとともに、仙台の新たな賑わいを創出する役割が期待されています。

3 地域づくりの方向性

(1) 田園・水辺・生物と共に生き、自然災害の経験を日常に活かすまち

虫の音が聞こえる田園、恵みと畏敬の念をもたらす海、卸町のケヤキ並木、白鳥が訪れる湖沼など、若林区には他区にはない豊かな環境があります。区内には広瀬川と名取川が流れており、まちの中には堀が網の目のように張り巡らされています。また、沿岸部ではかつて漁業が行われ、海水浴客で賑わっていた歴史もあるなど、水辺の近いところで生活が営まれてきたことも特徴的です。

現在、六郷堀と七郷堀は農業用水路として重要な役割を担っていますが、非かんがい期における試験的な通水の取り組みが環境用水として法的に制度化される契機にもなったように、住民一人ひとりの手によってこれらの自然環境や豊かな水環境は継承されてきました。

今後も自然環境を守り、歴史ある水資源を活用する取り組みを進めていくとともに、海洋ごみを削減する取り組みなどを通じて生態系を維持し、より多くの人が海や水辺に親しめる機会を、区域を越えてつくっていきます。

また、若林区では遺跡等の様子からも地震や洪水の痕跡をみることができ、この地域の暮らしは常に自然災害とともにあったことが分かります。そのため、海岸には海岸防災林が造られ、人々は水害を避けるために微高地に集落をつくるなど、生活の知恵を張り巡らして営みを続けてきました。

将来の災害にしなやかに対応できるまちをつくるため、せんだい3.11メモリアル交流館や震災遺構仙台市立荒浜小学校などを活用して災害の歴史とともにそこで培われた知恵を学ぶなど、地域活動や教育を通じて、災害のリスクを意識した暮らし方を考える機会をつくり、具体的な行動を日常生活に根付かせる取り組みを行っていきます。



(2) 新旧の住民が混ざりあい、支えあうあたたかなまち

若林区には、東日本大震災により被災された方々の住まいとして復興公営住宅や防災集団移転先団地が整備され、区内外の方々が新たな地域での生活を始めました。一方で、地下鉄東西線の開業により沿線周辺の利便性が向上し、若い世代や外国人を含む人口が増加するなど、地域を構成する方々の顔ぶれも変わり始めています。

特に若い世帯の流入によって子どもの数が増え、活気があふれる状況となっており、2020年には荒井小学校が開校するなど施設整備が進められていますが、今後、子育て相談窓口や子どもの遊び場の充実など、より一層の環境づくりが求められています。

そこで、子育てに関する悩みや困りごとに速やかに対応できるよう、相談支援体制の充実を図るとともに、地域全体で住民の安全を守り、安心して生活ができるまちづくりを進めていきます。また、地域に散らばる資源を活用しながら、住民が安心して過ごせる居場所を地域で共につくっていきます。

また、若林区でも高齢化に伴う健康上の問題や社会的孤立も大きな課題となっています。年齢にかかわらず、住み慣れた地域で安心して暮らすことができるよう、社会的な孤立を防ぐ取り組みや、心身の健康を保つ取り組みを、地域特性も踏まえながら、地域住民や関係機関と協力して進めていきます。さらには、性別や国籍、障害の有無などにかかわらず、様々な人々が交流できる場づくりを支援し、新たなコミュニティの活性化を目指します。



(3) 歴史のなかで暮らし、地域の魅力を育てあうまち

南材木町や河原町などに残る街道沿いの伝統的な建物や、職人や町人にちなんだ町名、子どもたちの遊び場でもある遠見塚古墳や、定期的に市が開かれる史跡など、若林区には様々な歴史が人々の暮らしに根付いています。そうした歴史を知り、自分が暮らす土地に愛着と誇りを持てるようにするために、何気ない風景にある魅力に気づき、親しみを抱くことができるような機会をつくっていきます。

そこで、若い世代から年配の方々まで、歴史や地域の魅力に気づくことができる学びの場や、沿岸部の農業や水辺を活用した新たな学びの場づくりに取り組みます。さらに、東部沿岸エリアに点在する施設や団体を、区域を越えてネットワーク化することで、地域の歴史や文化の伝承、豊かな自然の再発見や新たな賑わいの創出など、エリア全体について情報共有と協働を促すとともに、地域外に向けた情報発信

を進めていきます。

若林区では、新しい住宅地の開発に加え、東北学院大学の新キャンパスが開設するなど、若い世代の流入が見込まれています。学生をはじめとした若い世代をまちづくりの新たなパートナーとして迎え、地域全体で魅力を高めあう環境づくりに取り組みます。



(4) 多様な協働を通じて、新しい変化を生み出すまち

現在、若林区は三つの大きな変化に直面しています。第一に、地下鉄東西線の開業による沿線の新たな土地利用と人口の増加。第二に、東北学院大学の移転に伴う学生と教職員の集中。第三に、津波被害を受けた東部地域における集団移転跡地の活用。これらの変化をまちの活力に変えるため、地域で活動する多様な人たちが互いに協働して、新しい変化をつくり出す環境づくりに取り組んでいきます。

かねてから若林区では、住民が主体となって、朝市やマルシェ、マラソン大会などが開かれ、まちの魅力を育てる取り組みが継続して行われてきました。今後も新たな実践を生み出し続けるため、人と人が結びつくための場づくりや新たな担い手が育つ環境づくりに取り組むとともに、東北学院大学の新キャンパス設置を契機に、区の様々な地域資源と大学とのコラボレーションや、地元企業との共同開発・研究を目的とした産学連携、外国人留学生や在留外国人との共生を進め、地域が学生を育て、学生が地域を元気にするような相互の関係を通じ、すべての世代が地域づくりに関わっていけるような機会をつくり出します。

また、若林区には、文化芸術や起業支援などの様々な施設、陸奥国分寺薬師堂に代表される歴史資産や、市街地から比較的近くに立地する海辺などの自然資源など、活力を生み出す豊かな土壌があります。それらの土壌を最大限活かすとともに、NPOや企業などが持つ新しい発想をまちづくりに活かし、若者の増加が見込まれる市街地や、変化が生まれ活性化しつつある海浜地域などにおいて、新たな賑わいづくりにつなげていきます。

太白区

1 区の成り立ち

(1) 位置

太白区は、市の南西部に位置し、名取川河口近くから山形県境まで東西に帯状に広がっています。

地下鉄南北線の南の始発駅と東西線の西の始発駅を有し、JR東北本線や東北自動車道、仙台南部道路などが通っているほか、仙台空港が至近距離にあります。特に地下鉄・JR長町駅周辺は、交通の利便性が高く、仙台都市圏南部の広域拠点としての役割を担っています。



太白区 (うち秋保総合支所管轄地域)		
人口	232,317人	4,097人
世帯数	105,779世帯	1,804世帯
面積	228km ²	145km ²

※2020.10.1現在推計人口

(2) 成り立ち

太白区は、市制施行時の旧仙台市域へ編入された長町と、以降順次編入された西多賀村や中田村、生出村に加え、政令指定都市を目指す中で合併した旧秋保町を区域としています。

区名は、平野部の西に位置する太白山に由来します。太白山はきれいな三角形が仙台湾からも確認でき、古くから漁船の目印とされるなど、地域のシンボルとして親しまれてきました。

2 特性と動向

(1) 現状

太白区は、他区と比べて年少人口と高齢人口の割合が高くなっています。昼夜間人口比率が5区の中で最も低く、区外に通勤・通学をしている人が多くなっています。地下鉄南北線とJR東北本線が通っていることや、土地区画整理事業が進んだことから、あすと長町や富沢などの地域では戸建て住宅や集合住宅が建設されており、子育て世帯をはじめとして人口の増加が続いています。その一方で、昭和に開発された丘陵部の住宅地や西部では人口減少・少子高齢化が進んでいる地域もあります。

地域の状況に応じて、生活課題が多様化していることから、地域での密接なつながりを基盤として、支えあうまちづくりが求められています。

(2) 地域の特徴



① 南部拠点地域

南部拠点地域は、JR長町駅周辺を中心とした市南部の中心地です。江戸時代に宿駅であった長町は、明治以降、1925年の大規模な貨物操車場の完成や、1928年の合併（当時は名取郡長町）を経て、交通・物流の拠点として発展し、商店街や青物市場に加え、工業が集積するなど広域拠点となる基盤が作られました。現在は、貨物操車場跡の区画整理事業によるあすと長町の誕生を機に、地下鉄・JR長町駅周辺や地下鉄長町南駅周辺を中心に、商業施設やスポーツ施設、中高層マンションなどの集合住宅の建設が進み、新しい賑わいを創出しています。

② 名取川右岸地域

名取川右岸地域は、JR南仙台駅周辺を中心に広がる宅地と農地からなる地域です。1941年に合併した名取郡中田村は、名取川のもたらす土地の利を活かして盛んに農業を営み、藩政時代から野菜供給の中心として発展してきました。現在は、幹線道路を中心に商業施設が集積し、長く暮らしている住民に加え、若い子育て世代が増加しており、農業のまちから住宅が連なるまちに変化しています。

③ 丘陵住宅地域

丘陵住宅地域は、八木山地区をはじめとした丘陵部に住宅団地が連なる地域です。地理的には、仙台城の南側に広がる藩有林が明治維新を経て、野球場や遊園地など娯楽の場として整備された八木山地区と、1932年に合併した名取郡西多賀村により主に構成されており、戦後の持ち家の需要の高まりにより、住宅が連なるまちの姿が形成されました。現在は、動物公園や遊園地の賑わいととも、2015年の地下鉄東西線の開業による西の起点駅の誕生により、新たなまちの魅力づくりが進められています。

④ 太白山周辺地域

太白山周辺地域は、太白山をはじめ豊かな自然環境に恵まれた地域です。1956年に合併した名取郡生出村は、明治時代に住民一体となって村づくりに取り組んで財政難を克服し、全国三大模範村として県内外から視察団が訪れるまでに成長させた歴史があります。古くから住民主体のまちづくりが進められ、現在もその精神は息づいており、豊かな自然資源を活かした地域活性化に向けた住民主体の活動が盛んに行われています。

⑤ 秋保地域

秋保地域は、二口峡谷や秋保大滝などの観光資源と温泉に恵まれた地域です。1988年に合併した名取郡秋保町は、山形県へと通じる二口街道沿いに宿駅から発達したまちが形成され、秋保温泉は古くから療養の地として親しまれてきました。藩政時代には、仙台藩（伊達領）の療養の地でありつつ、西部の防衛の要、物資輸送経路として重要視され、西端の野尻には番所や足軽集落が設置された歴史を持ち、街道沿いに発達した長袋・馬場などの街並みは今でもその景観を色濃く残しています。現在は温泉やそば文化の発信など、豊かな地域資源を活かした体験型観光による交流活動、地域の魅力づくりが進められています。



3 地域づくりの方向性

(1) ともに支えあい、誰もが自分らしく健やかに暮らせるまち

人口減少・少子高齢化の進展などによるライフスタイルの変化や価値観の多様化を背景に、太白区においても住民ニーズや地域課題が一層、多岐にわたり複雑化していくことが予想されます。

こうした変化の中で、誰もが自分らしく健やかに暮らせるまちの実現に向け、障害のある方の社会参加の促進や、高齢者をはじめとした健康づくり、子育て世代の交流促進や身近な育児相談を含めた子育て支援を進めるとともに、ともに支えあいながら、複合的な問題にも対応できるよう、各分野を越えたつながりの強化を図ります。

また、多様な主体との協働による交通手段の確保など、日常生活における利便性の維持・改善に向けた取り組みを進め、地域の中で快適に暮らせる環境づくりに取り組んでいきます。



(2) 災害に強く、安全・安心に暮らせるまち

区内に名取川水系を有していることから、大雨等による洪水浸水想定区域が広く、また、1960年代に造成された団地には、築年数が相当経過した住宅等が多いことから、戸建て木造住宅の耐震化の促進や危険なブロック塀の除去に取り組むとともに、様々な災害への備えに対する意識をさらに浸透させていくことが重要となります。

災害から命を守り、被害を軽減するために、地域の特性に応じた市民一人ひとりの自助の力を高めるとともに、地域のネットワークを広げ、災害時要援護者対策を含めた共助の取り組みを推進し、災害に強いまちを目指します。

併せて、幹線道路等の整備を継続し、渋滞緩和、道路環境の改善を図り、地域や関係団体との連携による、交通安全や防犯の取り組みも進め、安全・安心に暮らせるまちづくりを推進します。



(3) 豊かな地域資源を活かした賑わいと潤いのあるまち

太白山や名取川などの自然環境に恵まれている太白区では、四季折々に個性あるイベントが区内各地で開催されています。また、郡山遺跡や富沢遺跡に代表される歴史資産や秋保の田植踊などの民俗芸能が地域で継承され、育まれてきました。さらに、プロスポーツやエンターテインメントに触れることで、まちに元気と活力が生まれています。

太白区が持つ豊かな地域資源を守り、磨き上げながら、その魅力を

実感できるよう、学び、感じ、伝える機会や場を創出し、賑わいと潤いのあるまちづくりを推進します。



(4) 幅広い世代が交流し、集い、活動が生まれるまち

区の東部では集合住宅の増加等に伴い、若い世代を中心とした住民が増加している一方、西部では高齢化の一層の進展が見られるなど、各地域をとりまく環境が個々に変化していく中で、様々な価値観や年代の住民が交流できる機会の創出が求められています。

住民との協働によるまちづくりや市民センターを拠点とした活動を通して、地域内の幅広い世代の交流を促し、多様性を尊重し互いに影響しあう機会を増やす取り組みを進めます。

また、地域を越えた担い手同士の交流や新たな担い手育成を目的とした事業を展開するなど、地域づくり活動の活性化と協働の輪を広げ、交流と活動が活発な住民主体のまちづくりを推進します。



(5) 多様な地域特性を活かせるまち

太白区は、秋保地域も含め、合併による区の成り立ちや地理的要因を踏まえた日常生活圏としての一体性、土地利用や都市機能などの特性に応じて、圏域ごとの動向や取り組みが異なります。

それぞれの圏域が持つ地域特性に応じた、きめ細かなまちづくりを推進します。

① 南部拠点地域

- 重要な交通結節点である地下鉄・JR長町駅周辺の駅前広場の活用や周辺幹線道路の整備を継続し、さらなる利便性向上を図ります。
- 地域団体や古くから続く商店街、地域活性化に取り組む学生などまちづくりの担い手との協働により、賑わいを創出し、さらなる魅力向上を目指します。
- 市民が集える空間・広場の有効活用を図るとともに、地域イベントなどを通じ、活力あふれるまちづくりを推進します。
- 古くから続く地域団体などまちづくりの担い手と協働しながら、居住時期の異なる住民の交流や幅広い世代間の交流を促し、互いに心地よい関係が生まれるまちを目指します。

② 名取川右岸地域

- 子育て関連機関や障害者・高齢者支援のネットワークのさらなる強化を進め、地域で育み、見守っていく環境づくりを進めます。
- 浸水想定区域の雨水排水設備の整備を着実に進め、浸水に対する地域全体の防災力向上を図ります。
- 浸水被害の危険性が高い特性に応じた避難訓練を継続的に進めるとともに、地域の特性に合わせた自助・共助の取り組みを進めます。
- 子どもから高齢者までの幅広い世代が一緒に楽しめる、街歩きイベントなどの取り組みが進められており、こうした交流の場づくりを促進し、地域の活性化を図ります。

③ 丘陵住宅地域

- 世代や立場を越えたつながりを深め、支えあいの活動の強化と次世代の担い手の育成を図りながら、地域防災力が根付いたまちづくりを目指します。
- 大学や地域団体等との協働により開催されている事業や、地下鉄八木山動物公園駅を中心とした公共施設等を活用し、地域の交流促進に取り組みます。
- 急な坂や狭い道路が多い地域を中心に、地域交通の確保に向けた多様な主体との協働による取り組みを進めます。
- 近隣の大学との連携により、大学生を中心とした若者世代のまちづくりへの関心を高めるなど、地域の活性化を図ります。

④ 太白山周辺地域

- 古くから地域で継承されてきた豊かな自然や文化等の資源を活用した四季折々の地域イベントを通じ、地域の活性化を図ります。
- 肥沃な粘土質の大地ときれいな水辺環境を活かした農業が営まれており、市民と農業の触れあいを活かした地域振興の取り組みを進めます。
- イノシシ等による農産物被害が増加しており、有害鳥獣対策の課題解消に向けて、地域や関係団体との協働による取り組みを進めます。
- 区内でも高齢化率が高い地域のため、路線バスや地域交通等の地域の移動手段の維持・確保など、地域課題の解消に向けた取り組みを進めます。

⑤ 秋保地域

- 高齢者や子育て世代が安心して暮らせるよう、豊かな地域コミュニティの維持・確保を支援するとともに、生きがいや活躍できる環境づくりを地域と一体となって進め、健康でいきいきと暮らせる地域づくりを進めます。
- 道路改良、防災対策、イノシシ・サルなどの有害鳥獣対策などの課題解消に向けて、地域や関係団体との協働による取り組みを進め、安全・安心して暮らせる生活環境の維持・確保に取り組んでいきます。
- 空き家を新たな資源と捉え、その利活用について地域との協働による情報提供の体制づくりを進め、子育て世代や農商工起業家などの移住に向けて取り組むとともに、路線バスや地域交通等の持続可能な移動手段の確保について、地域や地域団体と検討を進めます。
- 地域で活動する団体などの多様な主体と連携し、豊かな自然や歴史、民俗芸能伝承活動などの地域の魅力を活かした交流活動を支援するとともに、二口林道開通を基軸とした観光振興、仙山連携の取り組みを進め、市民や観光客との交流拡大につなげます。
- 農産物の特産品化の継承を推進し、生産意欲の向上や遊休農地の利活用につなげるとともに、地域ならではの産直活動を支援するなど、観光振興による地域経済の活性化を図ります。

泉区

1 区の成り立ち

(1) 位置

泉区は、市の北部に位置し、東西に長い形状となっています。北西部には泉ヶ岳を擁し、中央部に流れる七北田川など、恵まれた自然環境を持つ一方、泉中央地区には区役所や文化施設をはじめとする多様な機能が集積し、本市北部の拠点としての都市機能を併せ持っています。

地下鉄南北線の北の始発駅を有している泉中央地区は、仙台都市圏北部と仙台都心をつなぐ重要な交通拠点となっています。



泉 区	
人 口	212,499人
世帯数	93,577世帯
面 積	146km ²

※2020.10.1現在推計人口

(2) 成り立ち

泉区は、1988年に仙台市に編入された旧泉市を区域としています。1955年に七北田村と根白石村の合併により泉村が誕生し、町制施行により泉町へ、その後の人口急増の中で泉市へと移行しました。その後、仙台市との合併を経て、1989年の政令指定都市への移行に伴い、現在の泉区が誕生しました。

泉村から続く「泉」の名は、西方にそびえる泉ヶ岳を象徴した「泉」であり、泉ヶ岳を源泉とする河川・沼・堤などの豊かな水源を表す「泉」でもあります。

2 特性と動向

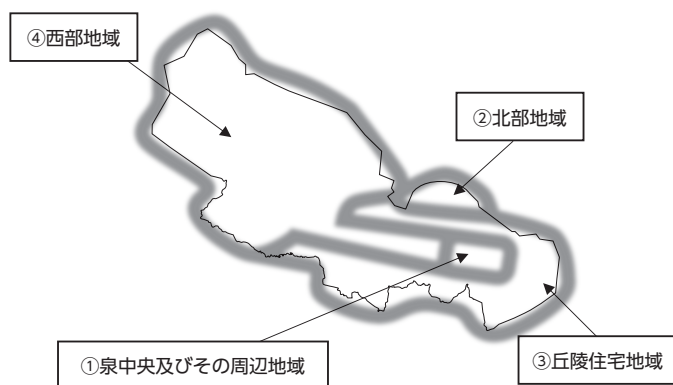
(1) 現状

泉区は5区の中でも、平成の間に最も人口が増加した区ですが、高齢人口割合が最も高くなっており、少子化と相まって死亡数が出生数を上回る自然減が進んでいます。また、近年は人口が減少に転じており、中でも西部地域や、1970年前後に造成された住宅団地において顕著な減少が見込まれています。一方で、地域コミュニティの基盤と

なる町内会の加入率が5区の中で最も高いという特徴があります。

人口減少や高齢化、単身高齢者の増加等の課題を地域ごとに見据えつつ、泉区が持つ多様な資源や地域のつながり、また、泉中央地区などでの新しいまちづくりの動きも活かしながら、多くの人が集い、まち全体の活力を生み出すための取り組みを進めていく必要があります。

(2) 地域の特徴



① 泉中央及びその周辺地域

現在の泉中央及びその周辺地域は、高度経済成長期の大規模な区画整理事業により形成されました。良好な立地条件のもと、泉区役所、泉中央駅などの地下鉄駅、都市部での憩いの場となっている七北田公園をはじめ、文化・スポーツ施設、子育て支援施設、商業施設、高層の集合住宅などが集中しています。歴史的に見ても、江戸時代の参勤交代の際の宿場町として栄えた七北田があるなど、古くから交通の要衝として発展してきた地域であり、現在では、充実した都市機能を有し、仙台都市圏北部から都心へアクセスする交通結節点となっています。

② 北部地域

北部地域は、工業団地である泉パークタウン・インダストリアルパークを中心とした本市産業の新しい展開を先導する拠点として、宮城県産業技術総合センターをはじめ、先端技術を育む企業や産業支援機能を持つ研究所などが立地しています。また、泉インターチェンジが近接し、高速道路へのアクセスも良好なため、流通機能や大規模商業施設等も進出しています。みどりが潤う中、職住近接で働

きやすいライフスタイルを実現できる環境が整ったエリアとなっています。

③ 丘陵住宅地域

丘陵住宅地域は、1960年代以降、区の中央部を流れる七北田川を挟んだ丘陵部に順次開発された住宅団地であり、その面積は区内市街地の大半を占めています。これらの住宅団地は、多くの緑地が良好に保全され、快適な居住環境を有しており、中でも、泉パークタウンは、全国の高いデザイン水準を持つ100の街を選ぶ「都市景観100選」に選ばれるなど、みどり豊かな街並みの美しさに定評があります。その一方で、いずれの住宅団地も整備から相当の年数が経過しており、他の地域よりも顕著な人口減少や高齢化の進展が予測されています。

④ 西部地域

西部地域は、泉区のシンボルである泉ヶ岳などの風光明媚な山岳景観と、その麓にある稲作を中心とした田園風景が広がる地域です。こうした豊かな自然環境は、登山やサイクリング、スノースポーツなど、四季を通じて自然に触れ、リフレッシュできる憩いの場として親しまれているほか、周辺地域の森林が水源涵養林としての公益的機能も果たすなど、市民生活に大きく貢献しています。また、この地域は、今でも由緒ある地名や伝統芸能が継承されている歴史と文化が色濃く根付いた地域でもあります。

3 地域づくりの方向性

(1) 一人ひとりが自分らしい心豊かな生活を送ることができる「安心」のまち

人生100年と言われる時代、住み慣れた地域で「安心」した生活を送り続けることができることは誰にとっても重要なことです。

泉区においては、他区に先行して高齢化等が進んでいくと見込まれており、誰もが豊かな人生を送るための健康や学び、日々の生活の安全に関する取り組みについても、力を入れて進めていく必要があります。

一方、要介護出現率が5区で最も低いこと、町内会加入率が最も高いことなどから、元気な高齢者が多く、地域のつながりが強い傾向も認められています。また、商業施設において気軽に参加できる学びの場が積極的に提供されているなど、民間企業においても生活を豊かに



するためのきっかけづくりが行われています。

このような状況を踏まえた上で、世代や性別、国籍や文化の違い、障害の有無などの多様性を認めあい、一人ひとりがそれぞれの地域でその人らしく自立し、日々の生活の安全も確保され、心身ともに健康で充実した生活を送ることができるまちに向けた取り組みを進めていきます。

まず、心身ともに健やかな状態を維持することはもとより、生きがいを持って豊かな暮らしを送ることができるよう、地域団体等と連携した身近な地域での健康づくりや、地域のつながりの中で人々が自分の経験、能力を活かしながら、いきいきと暮らせる地域づくりを促進していきます。

また、地震や豪雨災害へのハード・ソフト両面での対策を進めていくとともに、地域における防犯・交通安全対策の推進や自主防災活動の支援などを進めていくことにより、日々の生活の安全の確保を図っていくほか、地域づくりを担う人づくりなど、多様な地域課題の解決に向けた取り組みを進めていきます。

そのほか、スポーツ体験やイベントなどの交流の場を通して、多様な方々の相互理解を促進する取り組みを進めるとともに、外国人に優しいまちづくりを推進するなど、人々がお互いの違いを尊重し、支えあう地域づくりを目指します。



(2) 魅力的なコンテンツを上手に活かし、人を呼び込める「にぎわい」のまち

泉区中心部においては、ベガルタ仙台のホームゲーム開催の日にスタジアム周辺が多くの人で大変にぎわうほか、泉区民ふるさとまつり、泉マルシェなどのイベントも毎年多くの人を呼び込んでいます。

泉中央駅前では、道路法の特例に係る国家戦略特区の認定を受けて、ペDESTリアンデッキ下の空間がリニューアルされ、「isMe! おへそひろば」が設置されています。この広場においては、新しいイベントも数多く実施されており、今後も新たなにぎわいや交流の拠点としての機能が期待されています。

2023年に予定されている東北学院大学泉キャンパスの移転に伴う周辺地域への影響が想定されているものの、区内及び近隣に多くの大学を有していることもあり、様々な連携協力活動に取り組むことを目的とした協定を締結し、従前より大学の知的資源や若者独自の発想と行動力を活用したまちづくりを進めていることも泉区の強みです。

このような状況も踏まえた上で、今後とも、人口減少、高齢化が進展していく中で交流人口の拡大を図り、まちに「にぎわい」を生み続けていくための取り組みを進めていきます。

まず、学生をはじめとした若者や多様な団体と連携しながら、多くの人を集めるイベントの開催や、泉中央駅広場・ペDESTリアンデッキのさらなる利活用など、人を惹きつける取り組みを促進していきます。

また、多くの人が行き交う交通の要衝でもある泉中央地区のさらなる活性化に向け、民間活力を導入した泉区役所庁舎の建て替えを契機として、周辺エリアと一体となったまちづくりを進めていきます。

そのほか、若者の視点を取り入れながら、泉区の持つ多彩で魅力的なコンテンツの効果的な情報発信を推進し、多くの人を呼び込むことで、にぎわいのさらなる向上を図っていきます。



(3) みどり豊かな風景や四季折々の自然を身近に感じ、体験できる「癒し」のまち

泉区は、一人当たりの公園面積が5区の中で最も大きいなど、身近なみどりに恵まれています。登山、ハイキング、スキーなどが四季を通じて楽しめる泉ヶ岳、七北田川の豊かな自然、中心部からほど近い距離に広がる西部地区の原風景など、生活の身近なところに「癒し」がある点も泉区の大きな魅力です。

泉ヶ岳については、自然を身近に体験できるイベントが数多く開催されているだけでなく、恵まれた自然から生み出される豊かな水を利用して作られる農産物や日本酒など、全国的にも評価の高い特産品があるのも特徴です。

また、特に西部地域では、様々な郷土芸能が伝承されており、各地区の小学校にも受け継がれ、地域のまつりでも披露されるなど、地域の伝統や文化も身近に感じることができます。

将来にわたって、都市機能と自然が調和したまちを維持、発展させていくため、生活の身近なところで自然を感じ、触れあうことができるまちに向けた取り組みを進めていきます。

まず、豊かな自然資源や生活の中にある歴史資産、生活文化などを活用した観光振興を進めていくため、身近な自然や地域の伝統・文化を体験できる機会の創出を進めていきます。

また、住民による地域の憩いの場の環境整備や地域のニーズを取り入れた魅力的な公園づくりを進めていくなど、市民協働による生活の中の身近なみどりの維持・向上に努めていきます。

そのほか、大学等と連携した食育の推進や地元農家と連携した農業と関わるきっかけづくりを進めていくなど、多様な主体と連携した地産地消の機運の醸成も図っていきます。



(4) 洗練された街並みや日々の居心地のよさで選ばれ続ける「定住」のまち

泉区は、仙台市への編入前からベッドタウンとして発展してきたこともあり、定住率が5区の中で最も高く、昼夜間人口比率が太白区に次いで低いなど、住む場所として選ばれるまちといえる側面があります。

郊外住宅地の洗練された街並みや、地下鉄や高速道路をはじめとした交通網が充実していることによる、日々の通勤・通学や休日のレジャー等における近隣市区町村へのアクセスの良さなども、泉区の魅力の一つです。

一方、少子化による人口減少等の課題を踏まえ、子育てがしやすく、子どもの笑顔があふれるまち、人も仕事も多いまち、区外へ転出してもまた戻ってきたいと思うまちを目指した取り組みを進めていくことも必要です。

子育て世代にとって住んでみたいと思われるようなまちづくりを進めていくことはもちろん、現在住んでいる人がこれからも住み続けたいと思えるような「定住」のまちとして選ばれ続けるための取り組みを進めていきます。

まず、地域における子育て支援の取り組みや子連れで気軽に外出しやすい環境の整備など、子育て世代が安心して住むことができる環境づくりを進めていきます。

また、地域交通の確保や買い物困難者への対応など、今後、より深刻化すると見込まれる地域課題の解決に向け、民間企業や地域団体等、多様な主体と連携しながら、地域の実情に応じたきめ細かな取り組みを進めていきます。

そして、住み続けたいと思うまちづくりに向け、地域での活動を通して、地域を知る、学ぶ機会を充実させるなど、地域への愛着を育む取り組みも推進していきます。